

平成8年3月13日第3種郵便物認可 1996年8月12日発行(第2・4月曜日発行)

聴能情報誌

## みみだより

会員の誌代は会費に含まれています

第304号

第3巻

通巻389号

編集・発行人：みみだより会、立入 哉 〒300-11 茨城県稲敷郡阿見町荒川本郷2150-1-1-203 電話：0298-41-7069 FAX：0298-41-5682

## イスラエルAVR社に行ってきました！

6月2日(月)

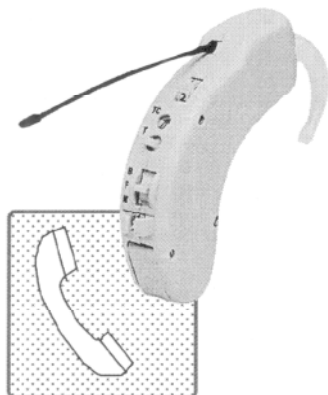
在、イスラエル、ハイファ。夜景がきれいだったノフホテル。

9:30、AVR社のダー社長が迎えに来てくれる。私は一応、フォーマルな格好をしていたが、彼はポロシャツにズボンにスニーカーという格好なので、かえって恐縮する。30分ほどでAVR本社に到着。イスラエル政府が誘致した工業地帯の中の1ビルの1フロアを使った本社で、補聴器の生産部署は畳で40畳ほどの小さい部屋で、ここで多くのFM補聴器を生産していると思うと本当に驚く。生産マネージャ、開発マネージャなどと会い、ダー社長より、Extend-Earの次期開発器種を紹介される。初代Extend-Earの問題点をほぼ完全に解消できる器種、スケルチ搭載(しかし、必要によってはホワイト・ノイズを出し、FM非受信を明確に知ることができる)、Tコイルを内蔵し、「B」時にFMと内蔵マイクのバランスを12dBの幅で変更可能に。その他、マイクもタイピンマイクを使うことで、2マイクが使えたりと、様々な工夫がなされている。どの新製品も我々が日本で「ここが問題だ」とか「こうした工夫を」というような提案を生かした工夫がなされており、彼らの製品開発のフレキシビリティを感じる。とかく、補聴器に対して様々な提案をしても、次の製品に何も生かされていないことが多く、残念に思うが、吸収力があるというか、ユーザーの意見を製品に生かすのが上手というのか、今度の新製品はそれなりに期待できそうに思える。

ニューExtend-Ear、RXシリーズの主な改良点

- ★B・F・Mの3段階スイッチ(電源は電池室で兼用)
- ★聞こえの程度によって、切替可能なスケルチ回路  
ホワイトノイズを出すか、出さないかを選択可能
- ★リニアアンプに加え、AGCアンプも用意
- ★Tコイルスイッチ(独立スイッチ)付きを用意
- ★オーディオシュー状の受信ユニットをかぶせることで、別の周波数を受信することが可能
- ★Bポジション時、MとFのバランスが変更可能
- ★受信アンテナが細く、耐久性も向上

イスラエルのテルアビブの難聴関連施設には、すでにInformationが配られていた。日本発売の予定日は未定とか。



# 人工内耳と出会う

— 教育現場から —

加藤慶子 (大宮聾学校)

[ACITA]の会員になってから5～6年になると思います。私はろう学校の教師ですが、人工内耳の手術を子どもとしては最初の頃に手術したY君を担当していた時から、[ACITA]とおつきあいさせてもらっています。Y君は3歳の時に髄膜炎で失聴し、4歳から大宮聾学校幼稚部に入学しました。今は小学6年生になりました。突然の失聴のショックのせいか、歩くことや普通の子どもだと当たり前の遊びも不安そうでした。当時、聴力検査の結果、反応があったのは250Hzで90dBの音だけでした。太鼓の音でON・OFFがわかり、また簡単なリズムの違いを聞き分けるぐらいで、呼んでも振り向くことはありませんでした。精神的に安定した頃から言葉は増えていきましたが、発音はくずれていきました。

この聴力ではなかなか自然な発音は難しいと考えましたが、ご両親からすれば何とか発音をきれいになりはしないかと思い、発音訓練装置を家で買うことまで考えた末に、出会ったのが人工内耳だったのだと思います。春休みにアメリカのペンシルバニア病院に相談に行くことを聞き、その行動力に驚いたものでした。先天、後天性に関わらず、親御さんは我が子が難聴であると受けとめてからも、次は「最高の医療を、最高の教育を」と悩まれるのだと思いました。

ご両親の希望を聞いて、新聞で読んだことはあってもY君自身にとっての適否は判断できませんでした。市内の通園施設に船坂先生が診療に来られる日に相談に伺いました。6、7年前のことなので、成人の症例はあっても日本では子どもの症例はなく、「時期尚早、文部省さんはリハビリのチームに入れますか？、他の職種の人と教師と一緒に動くのは難しくはありませんか？」との答えだったように覚えています。リハビリのチームをどう作るのかイメージが湧きませんでした。新しいことをするのに文部省を待っていたら、確かに気の遠くなるほどの時間は要すると思いました。しかし、『担任している子どもが手術をし、その後必要なリハビリが学校でできるものならば、「しよう」と思う教師は多いの』とも思ったものです。

その後、「時期尚早と言われても、親の気持ちはそういうものではない」とのお父さんの言葉に、親と教師の立場の違いを感じ、とにかく一緒に勉強しようと思いました。人工内耳に関わる研究会や学会に足を運び、情報を集めました。城間先生や中西先生、役員の岩沢さん、小木さんとお会いすることができ、学会の論文等ではわからない「生きた人工内耳」を知り、身近に考えられるようになりました。

見たことも触れたこともないと勝手に想像してしまい、どこかのえらい人がダメならダメ、良いなら良いという判断を鵜呑みにしてしまうところでした。城間先生や中西先生から人工内耳の適応について伺う中で、人工内耳は100dB以上の聴力の子どもが多いろう学校が、今後考えなければならなくなる問題なのだと認識するようになりました。

Y君は小学部2年の時に手術をし、3年生から地域の小学校に通っています。音入りに立ち会い、音の数の聞き分け、大小の聞き分け、簡単なことばの聞き分けができるようになったのを見たときは正直に良かったと思いました。手術後、2～3年間は、大きな変化はなかったのですが、音のある生活をしているなあと感じることがありました。Y君が4年生の時に「人工内耳をつけてどう？」と尋ねたら、「いろいろな音が聞こえて便利だよ」と言っていたので、少し期待したりもしました。しかし、5年生になると、人工内耳があまり生きていないのではないかと思うことがありました。電極が半分はずれてしまったこともあると思いますが、ご両親は期待していたよりも効果が少なかったことなどから、電極埋め込みの再手術には今のところ消極的なようです。

子どもの場合、気長に見守っていかないとわからないというのが感想です。教師の目で見れば、補聴器よりも効果はあったと思うのですが、親御さんの気持ちにするともう少し期待が大きかったようで、「こんな・・・」と思っているのではないかと想像しています。

幼少児について人工内耳の効果を左右するのは、①失聴時期、②失聴期間、③教育方法と言われていますが、Y君の場合は、失聴時期が3歳であり、言語習得も充分ではない時だったので、「術後の効果は、補聴器よりは良くても大きな効果が約束されているのではない」ことは何回も聞いていました。しかし、悩みに悩んでも、やはり期待してしまうのが親心なのだと思います。

Y君の手術から4年たち、保険の適用がされるようになり、今では50人以上の子も達が手術をしたようですが、その実態は5年前と変わらず、混沌としていてつかめない気がしています。

それは、幼少時期は本人が判断できず、親の希望で手術が行われるだけに、医学的・教育的にも、様々な意見が一致していないからだだと思います。[ACITA]の懇談会にここ何年かお母さんたちと参加していますが、医師や会社の立場からだけ聞いていると一般論ばかりで良くわからないのです。

「人工内耳の手術をして音が聞こえるようになった」と言う話を聞けば誰でもその一面に目をやります。しかし、問題は「どのようなケースに有効なのか」なのです。幼児の場合は正確に聴力検査ができるまでに時間がかかるため、高度難聴であるかどうかかわからないままに手術を求める親御さんもいると聞きます。また、術後の効果も相手子どもであるために評価でききれない状況にあるのでしょうか。そう言った「はっきりしない状態なのだから、手術は時期尚早」との批判も聞きます。医学の立場からも、教育の立場からも聞こえてくるのは、モヤモヤしたものばかりで、今、悩んでいる親御さんの疑問を解消するには至っていません。今、悩んでいる幼少児の親御さんや、教育現場に欲しいのは、教育的には成功でも失敗でも、その具体例だと思います。8月号の表紙に「インフォームド・コンセント」について書かれていましたが、病院の個人対応とは違って、教育現場としては、効果も限界も50人一人ひとりの貴重な体験から聞いた方が期待過剰にならないように思うのです・・・。

[ACITA]の懇談会や会報は、保険適用のことやリハビリの交流等大人にとって必要な情報が得られるのですが、手術をした子ども達や親御さんは違った悩みを持っているのではないかと思います。

病院によっては、STがいらないところもあるそうです。術前の適応に関わる煩雑な仕事は、忙しい医師にはできないと思います。そして、その後のケアは親の努力に任されるのでしょうか？。理解してくれない学校があったら、どうしたら良いのでしょうか？。こうした声を[ACITA]の会報に届けるにはどうしたら良いのでしょうか？。

「子どもたちの広場」と言う欄ができ、そうした質問・疑問を楽しみにしています。子どもたちの周囲の大人たちが一同に会して、普段困っていることや医学・教育等への期待や不満など出し合っても良いのではないかと思います。会員として、そうしたご相談にお応えするというのであれば、お手伝いできると思いますので、もし、お父さんやお母さんと同じように考えている方がいましたらお返事を下さい。

そして、もうひとつ提案ですが、人工内耳の幼少版ガイドブックを全国の難聴学級、ろう学校に配布する予算を文部省に組んでもらえるように、会として要請できないかと考えています。正しく知らないために学校現場は動揺しているように思います。適応対象の聴力レベルがいろいろと言われている中で、少なくとも、補聴器をつけて、聴覚学習・聴能訓練の機会を半年は持ち、相互に評価を下す場を作るなどのガイドラインができるまで、医学と教育の狭間で迷う子どもが出ないように、なによりも連絡・連携しあうということが大事なのだと思う、経験から得られたことを広めたいと思っています。

## 96年度下期難聴関係諸研究会・学会等日程一覧

日本特殊教育学会 9月14～16日(東京)

全国要約筆記問題研究集会 9月14～15日(岡山:津山鶴山ホテル)

日本聴覚医学会 10月3～4日(京都)

全日本聾教育研究大会 10月16～18日(茨城県水戸市:水戸聾学校)※

**フィッティング・フォーラム'96** 10月19日(茨城県内:会場未定)

日本音声言語医学会 11月9～10日(東京・東商ホール)

日本聴覚障害・教育工学研究会聴能部会「日本の(学校での)補聴器フィッティング」  
日程未定、会場交渉中

★筑波技術短期大学公開講座「補聴器のフィッティング」 11月29日～12月1日

※全日聾研の今後の予定:茨城→京都→福岡→松山→福島→福井→(北海道)

★の講習会は、6時間以上の補聴器のフィッティング実習を含む講座

### その他の聾学校を会場とする各地の研究会日程表 (会場はすべて聾学校)

東北聾教育研究大会	10月8・9日(秋田校)
北陸地区聾教育研究大会(中間報告)	10月9日(新潟・長岡校)
四国聾教育研究会 小学部会	10月24・25日(予定)(徳島校)
四国聾教育研究会 寄宿舎会	10月24・25日(予定)(宇和校)
東海地区聾教育研究大会	10月29日
北海道聴覚障害教育研究大会	10月31日・11月1日(北海道高等)
四国聾教育研究会 早期教育部会	11月7・8日(高知校)
四国聾教育研究会 中学部会	11月7・8日(香川校)
中国地区ろう教育研究会 重複障害児教育	11月15・16日(広島校)
中国地区ろう教育研究会 表現教育	11月15・16日(広島校)
中国地区ろう教育研究会 コミュニケーション	11月21・22日(呉校)
青森県特殊教育研究会聾教育部会	11月22日(青森県立青森校)
関東地区聾教育研究会「国語科教育」	11月22日(栃木校)
四国聾教育研究会 高等部会	11月23・24日(松山校)
中国地区ろう教育研究会 教科指導(理系)	11月28・29日(山口校)
中国地区ろう教育研究会 進路・指導	11月28・29日(山口校)
関東地区聾教育研究会「養護訓練」	1月24日(長野校)
関東地区聾教育研究会「養護訓練」	1月30日(千葉県立千葉校)
中国地区ろう教育研究会 養護・訓練	日時未定(松江校)
中国地区ろう教育研究会 健康教育	日時未定(下関校)
中国地区ろう教育研究会 教科指導	日時未定(岡山校)

講座のご案内

きこえとことばの関係講座 [初級]

と き : 5月18日~12月21日 (第1・第3土曜日、14回) 14:00~16:00

ところ : 堺聾学校 会議室・視聴覚室など

J R阪和線上野芝駅下車 泉北1号線に沿い、徒歩10分

受講料 : 無料

主 催 : 大阪府立堺聾学校

- 講座内容
- 5月18日 指文字について、きこえとことば(1)
  - 6月 1日 きこえとことば(2)、手話での約束ごと
  - 6月15日 簡単な手話の会話(1)、ことばを育てる(1)
  - 6月29日 ことばを育てる(1)、立体的な手話表現
  - 7月 6日 簡単な手話の会話(2)、手話の歴史と変遷
  - 7月27日 言葉を育てる親子の遊び、手話の表現と会話(1)
  - 8月31日 聴力について、聴力の測り方
  - 9月 7日 補聴器について、手話の表現と会話(2)
  - 9月21日 手話の表現と会話(3)、補聴器の付け方・使い方
  - 10月 5日 聴覚障害者と福祉事業、手話の表現と会話(4)
  - 10月19日 豊かな会話をめざして(1)、突然と聞こえ難くなる
  - 11月16日 老人の難聴と聞こえ、豊かな会話をめざして(2)
  - 12月 7日 豊かな会話をめざして(3)、聴覚障害児教育について
  - 12月21日 豊かな会話をめざして(4)、疑問に答える

問い合わせ先 : 堺聾学校学校開放講座係宛、FAX : 0722-57-3310

・・・ ひとこと ……

先日、近畿地方の聾学校を数校参観させていただけの機会を持った。どの聾学校も、これからの聾学校を見据えて、その県の聴覚障害児教育の将来を背負うためにどうしたら良いかを考え、行動している。

聾学校内に通級学級が設置できるようになり、以前の「フオーロー無きインテグレーション」から、制度的にも聾学校が聾学校在籍児以外のフオーローができる環境が整ってきた。前号で紹介した大阪市聾や上記の堺聾のように、聾学校が持つ専門性を公開し、社会からの利用に供することは、インテした児童の教育環境の向上のみならず、聴覚障害・ろうの理解促進を進め、しいては聴覚障害児者の生活環境の向上にも良い影響を及ぼすものと信じる。

聾学校がその地方の聴覚障害児教育のセンター的役割を担い、難聴学級・普通学級との連絡、補聴器の給付等との関係で福祉、さらに人工内耳の登場で、医療との連携も急務となっている。さまざまなバラ・エディケーション分野を聾学校が先頭となって切り拓くことが求められる時代になった。

こうした意欲的な取り組みは西日本が早い。今回、このことを再び納得する旅になった。「動いている」聾学校を西日本で見ることができた。東日本の聾学校はどうであろうか。

## セミナー御紹介

# 聴覚障害児の教育と発音指導

日時：1996年8月20日（火）

会場：中野サンプラザ（東京都中野区中野）

内容：9:30～10:50 「聴覚障害の病理と機能連携」筑波大学 吉岡博英

11:00～12:20 「聴覚口話法の意義と展開」筑波大学 斎藤佐和

13:20～16:40 「発音指導の実務」元筑波大学附属聾学校 岡辰夫

（13:20～14:20「発音指導の原理と留意点」）

（14:30～15:30「清直音の指導」）

（15:40～16:40「濁音・拗音の指導」）

受講料：6000円、3人以上の団体申し込み＝5500円

主催：障害児教育方法研究会（〒180 武蔵野市境南町2-12-8-712 コレール社内）

TEL：0422-34-6563、FAX：0422-34-6082

申込方法：下記の受講申込書に記入の上、現金書留で受講料を研究会宛に送金する。

キャンセル不可だが、代理受講は可能。受領次第、受講票が発送される。

指導力強化セミナー受講申込書・「みみだより」読者用 送信先：0422-34-6082

お名前	勤務先
受講票送付先（〒                      ）TEL:                      FAX:	
受講の動機（または、講師に尋ねたい「いま困っていること」）	

## 文献

「重度聴覚障害幼児の聴覚活用の評価 —— 観察評価表作成の試み ——」

松本末男他「筑波大学養護・訓練研究」9, 53-60, 1996

## 近刊図書

いずれも（株）コレール社刊「聴覚障害教育選書」として近刊予定

「聴覚障害教育情報ガイド」吉岡博英・四日市章・立入哉編著 2800円

「聴覚障害児の教育と方法」草薙進郎・四日市章編著 3000円

「教師と親のための補聴器活用ガイド」大沼直紀著（96年11月予定）

「聴覚障害児教育の革新」井原栄二・上野益雄・草薙進郎編著（97年1月予定）